

川越中学校初代校長 増野悦興の謎 (一)

滝澤 民夫

川越中学創立当初の「自修自治」精神の形成に多大な貢献をした増野悦興は、三三歳にしてなげ埼玉県第三中学校長として招聘され、なぜ二年間で休職となり、川越を去らねばならなかったのか。この謎がどうも解けないでいる。(注)

そうしたなか、教育者・思想家・キリスト者であった増野悦興の事跡をたどって、目白の同仁教会資料室、早稲田大学図書館、国会図書館、青山学院大学キリスト教資料センターなどに足を運んでいるのだが、三月末に雑司が谷霊園で、九千の墓のなかの増野家の墓所にたどりつくことができた。穏やかな春の木漏れ口のもと、ひっそりとしたたたずまいで、萩野吟子の墓のすぐ近くだった。



増野家の墓(東京雑司が谷霊園) [昭和十八年七月 増野肇之建]

また、川越中学校一回生で増野の薫陶を受けた七代校長岡田恒輔が、師の十回忌を記念して刊行した増野の遺稿集「筆華舌英」を国会図書館で見つけることもできた。

増野悦興は一八六五(慶応元)

年に津和野藩士の家に生まれた。生年月日は六月二日(杉井)と九月三日(岡田)とに分かれていた。同郷の森陽外は三歳年長だった。

幼少時に母が他界し、祖母に養育され、水戸に劣らぬ敬神の藩風のなかで生育した(子が回心の顛末)「丁酉倫理会 倫理講演集」八四号、「高貴なる人格」所収というが、父はどのような存在であったのだろうか。増野家については未調査である。

西南戦争の年、一八七七(明治一〇)年に津和野小学校を卒業後、二年間、周防山口の岡村圭三の塾で漢学を修めている。

一八七九年に東京に出て、東京一致神学校(築地の英和学校)のちの明治学院に入學した。この頃キリスト教に回心したという。学籍簿等の調査を行なってみたい。一八八〇年に新島襄の同志社に編入した。同級生は六三名で、学費もままならなかったため、学校の鐘叩き、教場の掃除をして賄料月謝を免除された。当時、

鳥さへも我が貧しさを笑ひてやポテトとなく藪のうぐいすと歌った増野(岡田増野先生伝)は、ボストンの説教家ピーチャーをめざして雷軒と号し、四条の大劇場の演説会で一人演説を試みた(安部磯雄「増野悦興君を憶う」)「筆華舌英」という。のち増野は、一八九六年に『講壇の英傑(ピーチョル伝)』を警声社書店から出版している。

一八八三年に徴兵令で退校し、翌年に再入學しているが、事情は定かではない。八五年に岸本能武太ら学友と同志社予備校を發起し幹事となるが、八六年に学友八名と学校・外国人教師に抗議して卒業直前に同志社を退學してしまつた。終生敬愛してやまなかつた新島の懇切な慰留を振り切つてである。その後、大阪で新聞「基督教青年」を發行するなどしているうちに、日本基督教伝道会社から熊本講義所に派遣され、日向高鍋の伝道にも従事した。

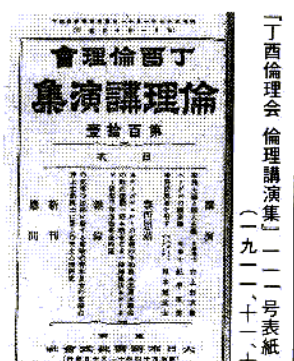
一八八八年には高鍋教会設立に参加、松山高吉の出席の下に、聖職任命の儀式である按手札を受け、浪花教会伝道主任、仮牧師を経て、岸和田教会の伝道も応援した。翌八九年一月に処女作である『英国清教徒紀事』を大阪の福音社から上梓した。翌月、キリスト教誌の『六合雑誌』一〇八号に新刊書籍として、「本書此徒の本末事歴と当代の清教徒たるエリオット、ハンブデン、ヒム、クロムウエル等の性行事業をも叙述すれば該徒の何物なりやを顕はして明瞭なり、文章は流暢にして誦すべし」と紹介されている。

大阪一致女学校(大阪女学院)教員を務めるかたわら、翌一八九〇(明治二三)年には同じ福音社から、『基督教青年』誌に雷軒清士の名で連載した「ジョン・ノック」を訂正増補した「汝温納屈斯小伝」を出版した。時にマルチンルーテルが日耳曼(ゲルマン)に唱へたる宗教改革の叫声、欧州全土に響き渡りし時代に、「ジョン・スコットランド」を与へよ、然らず

んば死を与えよ」とした「熱膽鉄腸」ジョン・ノックスの小伝は定価四銭であった。そしてこの年、二二歳の増野は渡米する。マサチューセッツ州ボストン郊外のアンドヴァー神学校とメイン州バンゴア神学校に学び、日清戦争前年の一八九三年にバチエラー・オブ・デヴィイニティ(神学士号)を取得して帰国した。アンドヴァー神学校には、かつて新島が学んでおり、何らかの形で新島の援助があったと考えられるが、渡米の経緯も北米での學問と生活の様子も定かではない。四年間余の北米留學は増野の思想形成にどのような影響を与えたのだろうか。これも謎である。

帰国後、十月と十二月に「種類と程度」新神學運動一転歩の時期熟すとたて続けに、自由神學の観点から聖書無謬説を痛論して「其れ聖書に一点の誤謬なしなどと云ふは狂愚の極のみ」とする強烈な文章を発表した(『六合雑誌』一五四、一五六号)。なお、岡田増野先生伝には、帰国した年、肺患で一年間休養したとある。これは増野の宿痼となつた。

同志社の出身で、ともに早稲田大学教授となつた岸本能武太と安部磯雄は、一九一一(明治四四)年一〇月一八日に失意のうちに四七歳で他界した増野を悼んでおり、翌一月、岸本は「丁酉倫理会 倫理講演集」一一一巻頭に遺影と「故増野悦興小伝」を掲げ、「増野悦興君を弔す」を寄せた。それによれば、辞世の句は



「丁酉倫理會 倫理講演集」一一一巻表紙 (一九一一)

われたハーヴァード帰りの岸本(佐藤能丸「異彩の學者人脈 大学文化論試論」芙蓉書房出版)は、増野を追悼して、「幼時より君の不幸なる境遇は君をして孤独の人、寡言の人、打ち解けざる人、誤解せられ易き人とならしめた。君の事業は殆ど悉く中止の姿に陥つたのである。比較的に成功したのは日向高鍋の伝道事業と埼玉県川越の中学校創立との二つのみであらう」としている。

ちなみに、増野の公表された最後の提言は「女子教育の意義に就きて」(「丁酉倫理會 倫理講演集」九九号)であった。増野悦興関連の調査経過報告は、郷土部報「初雁」二三号に掲載の予定である。

(注) 増野悦興については、岡田恒輔「増野先生伝」(『筆華舌英』)、同志社大学の杉井六郎「増野悦興」(『キリスト教歴史大事典』)、増野の嗣子増野肇「キリスト教ユニバーサリズムの渡来」(『新神學の消長』)、早稲田商學「二三二、二三七号」、川越高校一六回生の児島康夫「増野悦興論の試み」(川越高校創立八十周年記念誌)、「高貴なる人格」初代校長増野悦興先生との出会い(『川高同窓會報』五五号)、拙稿「埼玉県第三中学校開校式前後」(同前五七号)などがある。

(高一八回)